

## 治水・利水の祈りと総宮大明神黒獅子舞の発生 —獅子の芸能を民俗社会史的観点から考察する—

菊地 和博

卯の花姫伝承では、卯の花姫が三淵（淵）に身を投げて大蛇に身を変えたことから、卯の花姫自身が三淵（淵）明神の祭神となって祀られたとされている。ただし、江戸時代の記録集『牛の涎』を注視すれば、卯の花姫は総宮大明神の奥の院がある野川上流の三淵（淵）に登り、自ら犯した罪について、三淵（淵）の神の前にぬかづいて懺悔する場面が描かれている。卯の花姫伝承より先に三淵（淵）の神があり、それが総宮大明神の奥の院であるという認識がすでに成立していたことが読み取れる。

そもそも置賜野川上流に祀られた三淵（淵）明神は、野川の氾濫に対する流域の人々の治水の祈り、あるいは流し木や農業用水（堰）の利水の祈りから生み出されたものである。江戸期の記録によれば、古くから三（淵）淵には大蛇が棲んでいるという信仰があったことがわかるが、その背景に大蛇は治水や利水を司る水神様として流域の人々に崇敬されてきた歴史があった。大蛇こそ黒獅子の正体であり、この芸能は野川と深く関わってきた人々の苦闘の歴史を今に伝えている。

大蛇（龍神）が奥の院から野川を下って里宮である総宮大明神の祭礼前夜に社殿に入るという伝承は、神と人間を繋ぐ媒体伝承として巧みに考え出されたものである。三淵（淵）明神が大蛇の姿を模した黒獅子となって集落を巡るのは、多くの人々に三淵（淵）の神の恩恵が授けられるようにとの庶民の芸能的知恵であり演出であった。それが今では「ながい黒獅子まつり」として発展し、地域の振興に大いに貢献している。

### はじめに

総宮大明神（現総宮神社）とは長井市宮に鎮座する古社である。獅子舞は祭礼の時に神輿渡御に先立って、厄を祓いながら「道中振り」の舞を行いながら集落内を広く巡る。それは長井地域の固有の文化として伝承されてきた。この獅子舞は通称「黒獅子」と言われて黒色のカシラ（蛇頭）をもち、長い幕の中に多人数が入ってくねりながら動き回る。この種の獅子舞は山形県内では主として西置賜地方に分布している。この黒獅子の発生には、長井地域を貫いて流れる置賜野川（以下野川）の水神とされ

る大蛇の信仰、さらには卯の花姫伝承が絡んでいると言われてきた。

本稿では、野川にみられる治水と利水の苦難の歴史を振り返りつつ、野川がどれほど人々の生活に関わりが深い河川であったのか、今も三淵（淵）明神を祀る人々への聞き取りや資料を通して検証してみた。それらを踏まえて、三淵（淵）明神への人々の祈りや願いの強さが黒獅子舞の発生に繋がっていることを論じた。

## 1. 総宮大明神の黒獅子舞を論じる視点

### (1)大蛇信仰と神観念

旧『長井市史』では総宮大明神の獅子舞の始まりとして、ある1つの伝承があると述べている。それは総宮大明神の祭礼と関連するもので大蛇を龍神として次のように記述している（注1）。

祭礼日前夜に、宮明神の祭神が三淵の奥の院から龍神に先払いをさせて野川伝いに里宮（宮明神）まで渡御されるが、（獅子舞は）その時の蛇の水面を進む姿を舞にしたものである。〔（ ）は筆者補足〕

ここでは、総宮大明神の祭神が野川上流に鎮座する奥の院（三淵）から里宮（総宮大明神）まで渡御する際の「先払い」をするのが龍神であるとしている。大蛇とは水を司る水神であるが、それは日本の庶民信仰ではほぼ龍神と同じである。それは、「龍神信仰の基底には蛇神信仰があると見る見方が一般的である。（中略）龍神はそれに不可欠な水を司る神として信仰される」という見解に基づく（注2）。この引用文でも大蛇すなわち龍神としている。さて、ここでは龍神はあくまでも神の「先払い」の役目であるにすぎない。しかし、同じ旧『長井市史』では卯の花姫伝承を踏まえて次のように微妙に変化していることは見逃せない（注3）。

里宮の大祭には奥の院の三淵から大神を迎えることになるが、三淵の神は卯の花姫伝承では姫が三淵に身を投じ、大蛇となって神に祀られたという。この大蛇が白鳥神社の祭礼に招かれ、野川の流れを下る姿が宮の獅子舞の姿であるといわれている。

この文では、卯の花姫が三淵に身を投じて大蛇となって神に祀られたとしている。大蛇（龍神）は先に引用した文にある「先払い」の役目ではなく、神そのものとなって白鳥神社（総宮大明神の古名）の祭礼に招かれるのである。ただしこの神は卯の花姫である。このような変化をみせるのは卯の花姫伝承においてであるとしている。

卯の花姫伝承とは、江戸時代に書かれた『牛の涎』という記録集に登場する。この卯の花姫伝承の中では姫自身が神そのものに昇華している。しかし、そもそも根底には野川に棲息する大蛇（龍神）への信仰が伝承に先立ってあるのではないかと、それが本稿の問題意識である。庶民の暮らしにとっては大蛇信仰が重要であり、大蛇こそ神そのものであって卯の花姫の祭神化は二次的な後日譚ではないか。そう考えることによって黒獅子舞発生の本質は的確に捉えられる、とするのが本稿の基本的立場であ

る。黒獅子舞発生に関する先行研究や適切な参考文献は見出すことができない。このことの問題解決に向けて、これまで総宮大明神の獅子舞発生がどのように語られてきたのか、以下にみってみる。

## (2)黒獅子舞発生と「蛇面」のカシラ

総宮大明神の黒獅子舞について、現有する獅子頭に「寛文11年9月19日改」の銘（1671年）をもつものがあり、少なくとも江戸時代前期には総宮大明神で獅子が舞っていたことが考えられる。『総宮神社略誌』の「由緒」によれば、康平6年（1063）源頼義が前九年の役の戦勝祝いに総宮大明神（当時は「赤崩山白鳥大明神」）の社殿を再建、同年9月19日落成した。そこで祭典を催して軍士に獅子舞を舞わせたとある（注4）。一方、『牛の涎』巻44の46「獅子舞」には、次のように記されている（注5）。

米沢宮村鎮守の獅子舞ハ伊勢山田八社の祭礼に似たり、かかる事ハ漢士にも亦有事にや、（以下略）宮村の獅子亦蛇面也

この文では「伊勢山田八社の祭礼」で舞われる獅子舞が総宮大明神獅子舞に似ていると言う。それを受けてか旧『長井市史』でも「伊勢の宇治山田八社の神楽の安鞍流の獅子舞が伝えられたもの」と記している（注6）。確かに現在も宇治山田八社の各神社境内や氏子の家を廻る獅子舞「御頭神事」は行われている。しかしそれが総宮に伝えられたのはいつか、それを裏付ける根拠は何か。源頼義の戦勝祭典時の開始説を含めて、これらの説の信憑性があらためて問われるべきである。黒獅子舞の発生については、もっと長井の地域の人々の暮らしの視点に立って考えてみる必要があることを強調したい。

そこで、黒獅子舞発生を論ずるのであれば、上記文最後にある「蛇面」にこそ注目しなければならないだろう。因本『牛の涎』巻9-17にも同じく「蛇面」の文字が見える（注7）。

此神の祭日ハ七月十八日十九日 九月十八日十九日廿日、此祭礼に獅子舞と云楽あり、今ハ其楽も廢れて社庭にて獅子をかぶり舞斗也、此獅子の面他に異なる事あり蛇面也

上記『牛の涎』の2つの引用文に共通するのは、黒獅子舞のカシラが「蛇面」であることが強調されていることである。ここがポイントであろう。蛇面（蛇頭）とは総宮大明神の黒獅子舞の成り立ちに大きく関わる造形的特徴である。それは黒獅子舞は野川に棲息する大蛇を模したものという根強い伝承に通じる。総宮大明神の黒獅子舞は、この野川という河川と人々との関わりにおいて論じられるべきである。

## 2. 暮らしの歴史と現況把握

### (1)置賜野川の治水と利水の歴史

ここでは、置賜野川がどういう河川であったのかを、治水や利水などの面から歴史を振り返って理解することに努めたい。

### ①暴れ川と治水

野川は西方に聳え立つ朝日連峰の大朝日岳(1870m)の南方にある平岩山(1609m)に端をしている。山々のV字溪谷を東南に向かう流れは、山麓に広がる長井扇状地の扇頂部に突き当たる。その結果、大雨が降れば鉄砲水はたちまち扇頂から扇状地内を襲うことになる。実際に洪水はひんぱんに起っており、大被害をもたらした洪水は宝暦7年(1757)、明和6年(1769)などが知られている。野川はいわゆる暴れ川といわれるゆえんである。ようやく明和7年8月に国役普請による締切(メ切)堤防が竣工することとなり、幕府の築堤奉行が派遣されて工事の指揮に当たっている。また米沢藩でも明和8年に独自の締切(メ切)堤防を築いている。この締切(メ切)堤防は明治36年8月の大水による堤防決壊まで132年もの間、平山・九野本・宮・小出の4か村を洪水の被害から守っている。

### ②利水の取組み

一方、野川は農業や町場で生活を送る人々にとっては不可欠な川として貴重な存在であった。『元置賜村反別』にみる村々の田水』では、江戸時代後期の当地22か村の灌漑用水の種別を表にしている(注8)。それによれば、野川から灌漑用水として取水する堰は、平山堰・九野本堰・栃木堰・中村堰であり、それらは、寺泉・成田・五十川・中・時庭・萩生・上九野本・下九野本・平山・小出・宮・泉の村々の水田を潤した。

野川から引いた堰・水路・小河川は、町場を編み目状に東西に走って住居の敷地内も流れ、人々はそれらを産業用水や生活水として利用してきた。利水面の一つの事例として、木蓮川(木蓮堰)は野川本流の水を引いて、旧平山村・小出村・宮村の3ヶ村の灌漑・飲用・雑用水にあてた重要な堰である。平野村の記録によると、木蓮川では野川上流の山で伐採した木材を野川の下川に流す流し木(木流し)が行われた。急流の野川を流した後は、一旦木蓮堰付近の木場に集積した後、木蓮川を水路として町場まで流し小出薬師寺裏などで陸揚げし、木材は燃料として一般に売りに出された(江戸期は米沢藩直営の製蠟の燃料としても利用)。流し木は、野川にダムが建設された昭和28年頃まで行われている(注9)。

### ③野川三堰

旧『長井市史』では、江戸時代から野川の本流をせき止めて堰に水を取り入れた「野川三堰」がじつに詳細に記されている(注10)。その一部を以下に参照する。まず、「一の堰」の栃木堰は、成田・五十川・寺泉の用水をさす。次に「二の堰」の一つは荒川堰であり、上下九野本・泉・小出・平山の用水をさす。さらにもう一つは中村堰であり、中・萩生・時庭の用水をさした。最後は「三の堰」は木蓮堰といい、平山・小出・宮の用水をさしている。

これまで、長井では野川の大規模な洪水の繰り返しに対して、上記のとおり堤防を築いて洪水を防ごうとする治水対策が試みられてきた。その一方で、農業や町場で生活を送る人々にとっては必要不可欠な川であって堰などによる利水事業を数多くみることができた。長井の人々にとって野川はまさに生活とともにある河川だったのである。

### (2)総宮大明神の来歴

本題である黒獅子舞を有する総宮大明神とはどんな来歴を持つ古社なのかを確認しておこう。『牛の涎』『宮村明神』では、「元禄五年天奏を経て正一位にならせ給ふ」



とある（注11）。官位を受けた正一位総宮大明神の存在は元禄5年（1692）におぼろげながらその姿を現してくるが、それ以前の姿はほとんど明確ではない。「宮邑昔はなし」（『総宮神社略誌』の「明神の事」）には、「赤崩山正一位惣宮大明神は、宮木立物かたふりて鎮知れがたし、利罰あらたなる御神なり、遍照寺六坊神主ともありて凡そ下長井郷の惣鎮守也」とある（注12）。また上記同書の「同社由来知れざる事」では「当社縁起知れがたし、里人の云伝ふる事もとりとりなり、但由来知れざるを以て本説とするなり、むかし松川の河上にある赤崩より飛び来たり玉ふといへり、また一説に、安部貞任の息女の神霊をまつるともいへり、また寺泉三淵の明神は此方大明神の姉にてましますとも言伝ふ」などと諸説を紹介している。さらに同書「宥日日記」の「大明神の御事」書き出しにも同様のことが記されており、「神社の始まりがわかっていない。里人の語り伝える所もまちまちである」としているのも象徴的である。

総宮大明神の来歴が比較的明確に記載されているのは、明治13年（1880）6月2日に県社に加えられた際の記録である（注13）。

一、祭神 日本武尊 延暦二十一年勧請  
 合殿  
 大己貴命  
 天児屋根命 勧請年歴不詳  
 稻倉魂命

これによれば、祭神である日本武尊は延暦21年（802）に勧請されたことになっている。このことについて、同書「由緒」では、同じ延暦21年に征夷大將軍坂上田村麻呂東征の際に日本尊命の神徳を追尊し、始めて神社を今の鎮座の地に建て、赤崩山白鳥大明神と命名したと記している。この神社建立と日本尊命の勧請年が一致している。これによって総宮大明神は平安時代前期に存在していたことになるが、これを裏付ける史料はない。やはり「当社縁起知れがたし」であろうか。

### (3)総宮大明神祭礼前夜の「神迎え神事」

今なお、総宮大明神では祭礼にあたって三淵（淵）から神を迎える神事を、丁重かつ厳かに執り行っていることを、ここでは是非とも紹介しなければならない。

#### ①神迎えにまつわる2つの伝承

総宮大明神祭礼の前夜7月17日夜は野川上流の三淵（淵）の神である大蛇（龍神）が野川に雨を降らせ、その流れに乗って下り総宮大明神の社殿に入るのだと伝えられてきた。ただ直接社殿に入るのではなく、途中に化粧坂聖観音堂という場所で小休止し、櫛篁を出して化粧をし、その後総宮社殿に入るのである。これに関して次のような伝承が知られている（注14）。

往昔、宮の明神の祭礼日たる九月十八日（旧暦）の宵祭りに、野川の川狩半三郎なる者、川端に出て、袴を着け荒筵に端座して一心に祈願を捧げていると、寥々たる川風とともに、巨眼灼々として、川面より上半身をのり出し、「半三郎半三郎」と二声・三声呼びながら、金の鱗を見せ川を渡ったという。途中、成田村館観音に小憩され、櫛篁を出して化粧して風を呼び、御入社になったという。この姿こそ今に残る獅子頭の姿だという。その後土民は館観音を化粧観音と呼ぶよ

うになった。

なお、この伝承と類似することが『野川の郷』に記されているので引用する（注15）。

平山の青木三郎は龍神が野川を下られるとき、龍神は雨雲にのって下り、半三郎が野川口の川原に祭壇をつくり燈明をつけて平伏し、拝んでいると天上の雨雲の中から「半三郎、ごくろうさま」という龍神の声が聞こえたという。

ここに記されている青木半三郎とは、かつて野川の水流を利用した「流し木」用木材を伐採する野川山の山守を務めた人物であり、のちの考察で詳細に述べる。上記2つの伝承は、今なお地域の人々にまことしやかに語り継がれているものである。

#### ②現在の神迎え

ここでは、現在行われている「神迎え」の様子を記したものである。平成30年は、新暦9月15日総宮神社祭礼日の午前10時30分頃から、神主や役員など十数名の関係者が「神迎え」に神社を出立した。二十数年前までは三淵（淵）明神まで「神迎え」に行っていたとのことであるが、近年は竜神大橋の中央で三淵方面に向かって神迎え神事を行っている。この神事は祝詞奏上やお祓い、お神酒献上、笙の演奏などじつに丁重で恭しく行われる。令和元年の祭礼では、ボートで湖水を遡って三淵（淵）明神の鎮座する野川上流まで近づき、ボートを降りて左岸山上まで約100m登って直接三淵（淵）明神を参拝する予定であったが、諸般の事情により実現できなかった。ここまで真剣な迎え方をするのも実際にはなかなか見られないことであろう。

また、神迎えの帰路途中で成田地区にある化粧坂聖観音堂でも神事が行われる。ここで神事を行う理由は上記のとおりである。化粧坂聖観音堂の周辺は水田でおおわれているが、その中に高さ約90cmほどの観音堂がぽつんと鎮座している。本尊は成田地区の善明院に安置されてきた。午前11時過ぎにこの観音堂を前にして竜神大橋と同じく龍神を迎える神事が丁重に行われる。この観音堂は古くなったことで、平成31年2月に同じ成田地区にある「卯の花温泉はぎ乃湯」敷地内に新設され、本尊も堂内に安置されている。なお、化粧坂聖観音堂は元亀元年（1570）頃に水難を除くために建立したと伝えられる（注16）。

以上のような二段階の「神迎え」神事を経て、大蛇（龍神）は総宮大明神（現総宮神社）の社殿に入ると考えられており、毎年正午前には神迎えの神事行事を終える。現在もこの信仰儀礼が欠かさず実施されていることは驚きであり、感動的ですからある。

#### (4)「ながい黒獅子まつり」

「神迎え神事」を終えた午後、社殿にて獅子の「出御式」が行われ、社殿に入った大蛇（龍神）はいよいよ人々の前に姿を現すときが来る。その姿こそ黒色の蛇面（蛇頭）をもち長い幕をくねらせながら舞う「黒獅子」なのである。出御式のあとは神社境内で舞う「庭振り」、渡御行列として御神輿とともに町内を舞い歩く「道中振り」、獅子と警護が一騎打ちの力競べを行う「警護掛かり」などがいたるところで繰り広げられ、人々の熱烈な歓迎を受けるのである。一行が神社に戻ってくるのはなんと真夜中午前1時を過ぎている。これは総宮の場合に限らず、各社寺の祭礼時に行われる黒獅子舞の行程にほぼ共通している。

長井市中心街では、平成2年(1990)から近隣市町村の各黒獅子団体を招聘して「ながい黒獅子まつり」が行われてきた。令和元年現在、子ども獅子13団体を含む市内42の黒獅子団体が存在するなかで、毎年15前後の団体が順番に出場して各社寺単位で培われてきた舞を披露し合っている。そこは舞と囃子を担う老若男女にとって晴れの舞台であり、それを一目見ようと毎年市内外から大勢の観客が集まる賑わいのエリアとなる。今や「ながい黒獅子まつり」は、各地区社寺の黒獅子芸能が集結する魅力ある新しい祭りとしてその名が知られるようになっていく。令和元年(2019)は第30回目の節目を迎えた記念すべきまつりで、5月18日(土)・19日(日)の2日間にわたり盛大に行われ、長井市観光協会調べで約10万人の人出で賑わっている。平成22年度に「ふるさとイベント大賞奨励賞」、まつり実行委員会が第15回「地域づくり総務大臣表彰」を受けている。

野川という様々な利害がからむ河川を通じて人々の中に信仰や伝承が生まれ、それがいつしか黒獅子舞という具象化した祭礼芸能文化として地域社会にすっかり定着しているのである。

#### (5)卯の花姫伝承概略

次に卯の花姫伝承との関連について考える。戦乱の中で起きた悲しい姫物語として庶民の関心を引き寄せるに十分であるが、黒獅子舞との関連では、その話の流れを丁寧に分析していかなければならない。

この伝承の古い資料は江戸時代後期の『牛の涎』に詳細に記されている(注17)。前九年の役で登場し歴史的に実在する人物安倍貞任という武将の娘「卯の花姫」の物語である。この伝承がいつの頃からか三淵(淵)の大蛇(龍神)信仰と黒獅子舞の芸能に深く関わってきており、あらためてこの関係性を検討する必要がある。以下に全文を記す。なお「宗任」はすべて「貞任」の誤記であることも本文にただし書きされている。

宗任(注:「貞任」の誤記、以下同じ)の息女卯の花姫ハ八幡太郎を恋ひしたひ給ふを、八幡殿此姫にたよりて宗任の軍法を私に聞き知り給ひ、所々の合戦に勝利あり、姫宗任の戦死を聞て追福の為とて法華経を左手の指の血を絞り書写して観音大士の御首の内に納め給ふ、長井の末社 宮村に鎮守の五所明神是也 馬頭観音 此観音大士を仏師雲慶をして再興せしむる時、法華経を現に披見せし僧俗ともに大熱を發し多くハ死したり、或ハ御腹の内に納めたりとも云、其後越の境 越ハ今の越後越戸と云所あり、絶壁の山岩也、義家此嶮岨を踰て小国に御旗を入られ 越戸の峠岩石の上に義家の足跡併に匍匐の跡付て今の世に存す 小国を併せ、米澤を掌握し給ふ、義家はじめ卯の花姫を北の方にせんとして数通の起請を造り給ひしかとも、義家の諸手を得給ひし後ハ、いささか其氣しき無りけりハ、長井の庄もこらへかねて 長井の庄ハ要害の地なれハ、姫に一族郎等をあまた添て此長井を守らしむ、四方の道をふさき朝日の道一条とす、姫ハ屋形をひらき 卯の花の屋形と云、後の世政宗の頃 片倉小十郎再興、卯の花城と云、 朝日岩上の僧衆をたのまんとて野川口より走り給ふに、三淵の神ハ宮村鎮座の神の奥の院なれハ、誓ひの事ありとて三淵に至り神にぬかつき、且従者に謂てのたまふハ 過し年義家人をして密かに云ひおこせるハ、大邦に旗を進むるハ義家か趣意にあらず、君の命もたしかねつれハ也、故にこそ弓矢を張てせい旗の前に空しく月日を送るハ 將軍の 宗任をさす 降を俟

て共に脚を並へて教道し帰洛の上、義家よきに奏聞しなハ、將軍の本領安堵疑ひ有へからず、然る上ハ姫をハ義家か北の方に申請ふて都に迎とり候はん、此事かまひて人にもらし給ふへからず、諸手の先勢境をかし掠めし由義家に下知にあらず、全く兵どもの鬱を散らしたる迄なるへし、今是を制さハ義家も都に疑はれん事ヲおそれてあなちにととめかねつ、和議をとのふるの日戻し候へしと、教道の誓紙を添て給いぬ、都の人ハ跪の言多しと父君の常にのたまひしか今こそ思ひ合されつ、父を殺せる者ハ我也とさめさめと泣給ふ時、朝日岩上 岩上或書に祝ひ瓶山に作る の僧衆駆来り、義家の兵間道を踰て朝日岩上の僧宇を焼払ひ、一万斗の軍勢入替れりと誥るにそ、さらハ是迄とて綾の表着を脱て頭に覆ひ、山岩数丈絶壁の上より三瀨の中心に飛落給ひハ、相従ふ女房つぼね我も我もと飛落て見る間に三十四人死し卒ぬ、是を見るより郎等とのほら主人斯成給ふ上ハ、生残りて何かせん死して未来の御供せんと百騎余りの兵不残死亡しぬ

上記の卯の花姫伝承は、東北にあった平安時代末期の「前九年の役」という歴史的事実が背景として語られている。その頃の陸奥国の豪族安倍貞任は、この戦いで朝廷から派遣された源頼義・義家（八幡太郎）の軍勢と死闘を繰り広げるが、最後の軍事拠点である厨川の戦い（現岩手県盛岡市付近）で敗れて討たれる。

引用した『牛の涎』では、卯の花姫は敗北した安倍貞任の娘という設定であり、卯の花姫が敵方の源義家に恋をするという異色のシナリオが下地としてある。伝承は岩手から越後そして米沢、長井まで及ぶ広がりを見せて、史実からはかけ離れた構成となっている。しかし、長井ではこの卯の花姫伝承はまるで史実であったかの如く地名や伝説として色濃く残り、黒獅子舞の成り立ちにも深く関わっているのである。

のちの考察において、上記中段にある「三瀨に至り神にぬかつき」の部分や卯の花姫亡きあとに続く逸話を引用しながら検討を進めたい。

### 3. 考察

本稿は総宮大明神の黒獅子舞発生について、民俗芸能の観点ではなく民俗社会史的な観点から考察したものである。ここでは野川・人々のくらし・三瀨（淵）の神などが主たるキーワードになる。

#### (1)三瀨（淵）の「神人」（あかるき命）と大蛇

野川上流の三瀨（淵）に祀られる奥の院の神の由来に関して、以下の江戸時代の記述がある。三瀨（淵）明神の正体とは何かを知るうえで注視したい部分である。若干の省略を含みながら引用してみる（注18）。

宮村の五所明神後に正一位惣宮大明神と改めたり、此の社の奥の院と称する所ハ寺泉村の山おくに三瀨と云所ありて、此三瀨に住給ふ大蛇なり、此大蛇ハ上古此米沢のいまたひらけさる以前は鳥もかけりかたき高山幽谷にて在し、其高山におハせし神人なり、此神人をあかるき命（ミコト）と申せし也（中略）、後幾ばく星霜を経て復今の宮の社地に移り玉ふ



以上のように、野川の上流三淵（淵）には古代から大蛇が棲んでいたこと、それは神であり神人でもあったと記している。この大蛇つまり神人は「あかるき命」と言ったという。この神人は悪しき神々に妨害されいろいろ移り住む神話的な物語が途中に組み込まれているが、最終的に「あかるき命」は宮の社地に移ったとある。

この伝承は重要な示唆を含んでいる。人々の野川に対する長年の治水と利水の思いが大蛇信仰（水神信仰）というかたちとなって表れていること、また大蛇は野川上流の山奥にある三淵（淵）から、現在の総宮大明神がある平地に移り住んだということを描いている。このことによって、野川を通じて奥宮（奥の院）と里宮という存在の深い関係性が明らかにされている。このことはさらに、のちの祭礼前夜に大蛇つまり三淵（淵）明神が総宮大明神本殿に来訪するという話の下地となっていると考えられる。人々は祈りの対象を平地の里宮に新たに設けて、野川への治水と利水を切に祈ったということの証しでもあろう。

黒獅子の胴体を表現する長幕は、野川の川波をイメージした波紋様を描いている。長幕には多人数が入り込んで、まるで大蛇が水面を這うような蛇行を思わせるくねりの動きを繰り返す。大蛇を造形化したので獅子のカシラは平べったく面長で目が丸く飛び出た形状となっている。先に紹介した文献に「蛇面」とあったが地元では「蛇頭」（じゃがしら）と呼んでいる。

## (2)三淵（淵）明神への様々な祈り

### ①流し木の守り神

野川の流し木に関連して、『野川の郷』には以下のように記されている（注19）。

流し木最大の難所は三淵であった。ここは本流といいながら、川幅はわずかに2.7mほど。絶壁を形づくる峡谷である。文字通りの峡谷で、延長220m。三淵への最初の入り口は最も狭く、両岸は150cmそこそこに迫っていて、「吉平一ト跳ね」という伝説のあるところだ。谷は見上げる絶壁、岩上に茂る樹木のために昼なお暗く、滝の落下するところもあって水深は底知れず。このところを「三淵どあい」と呼んで恐れられていたところである。この狭い流れに滝壺があるので、流木はここに至ってみな停滞してしまう。自力脱出はとうていできない。これを「みどがくった」と称した。

同じように流し木と三淵（淵）について、旧『長井市史』には次のように記されている（注20）。

そこで固く停滞した流木を下流に流しやるために、絶壁を降下して詰まった流木を一本ごとに崩さなければならなかった。この作業には相当の勇気と熟練が必要であり、時には犠牲者が出る場合も少なくなかったと言われている。このため流木作業の安全を祈るために、三淵の出口と野川の支流布谷の合流地に祀られたのが、武御名方命を祭神とする三淵明神であった。

以上のように、野川の上流にある三淵（淵）とは流し木にとって大変な難所であった歴史があり、そこには作業安全を祈願して三淵（淵）明神が建立されたとある。「武御名方命」の神は、現在は諏訪大社の祭神となっているが、農耕時代に入ってから

水神として信仰されてきた経緯をもつ。

## ②青木家の流し木の守り神

前述の『野川の郷』には三湍（淵）明神に関する以下の記述がみられる（注21）。

この三湍明神の分霊を祀る祠が、平山小坂・青木芳夫宅の屋敷にあって、関係者は毎年8月朔日にお祭りを行っている。芳夫の先祖・半三郎と渋谷作兵衛は、ともに野川山の山守であったので、ことのほか三湍明神を信仰し、文化4年（1807）に分霊をうけて奉祠したものである。祭りの時は相当の参拝者があったという。信仰したのはおもに流木関係者・木こり・用水堰関係者であった。

以上から三湍（淵）明神は文化4年（1807）以前から野川上流に祀られていたことがわかる。上記文に示された青木半三郎家の現当主は青木芳夫氏であり、今も敷地内に三湍（淵）明神の石造の祠（高さ95.5cm、横（間口）47.4cm、奥行58.0cm）が建立されている。祭りの旧暦8月1日には、かつては渋谷作兵衛家とともにお祭りをしてきたようであるが、現在は青木家のみで「三湍大明神」の幟を立てお神酒を捧げて参拝しているという。三湍（淵）明神に関わって青木家に保管されているものは、まず「神祇官統領神祇伯王」から頂戴したとされる文化4年（1807）銘の書状（縦45.5cm、横60cm）が存在する。その文面は以下のとおりである。

今般依願而 羽州米沢下長井寺泉村ニ有之

三湍大明神祭所 罔象女神

奉勸遷

三湍大明神之神靈而奉遷於其

清地者也神靈到日宜祓除其祠

而永世奉安鎮之祭祀無懈怠於

被儘尊信懇祈者五穀豊饒子孫

永久幸可有守護者也

神祇官統領神祇伯王殿

文化四丁卯年正月 □掌 印

羽州米沢下長井寺泉村

願主 青木半三郎殿

渋谷作兵衛殿

この書状は、「羽州下長井寺泉村 青木半三郎 渋谷作兵衛」の両者が三湍大明神を「勸遷」つまり勸請を願い出たことについて、文化4年（1807）に「神祇官統領伯王殿」によって承認されたものである。大意は、三湍大明神の神靈（御神体）を清地に奉遷するので、神靈をお祓いし永世にわたり怠りなく安鎮祭祀し尊信懇祈すれば、五穀豊穰と子孫に永久に幸いが守護される、ということになるろうか。神祇伯王とは、神祇官という朝廷の祭祀を司る役所の長官であり、京都の白川家が代々世襲していたとされる。青木家と渋谷家では、神祇官の認可をもって三湍（淵）明神の分霊と祭神化が正式に認められたと受け止めてきた。両家にとって、明神はそれぞれ一族の守り神的な存在となってきたようである。

青木家には神鏡（直径5cm）もある。それは刺繍が施された赤系布地に麻糸が縦横に巻かれた四角形神璽（高さ8.8cm、奥行5.7cm、幅5.6cm）に添えられるかたちで存在する。神鏡を入れた箱の正面には「弘化二年四月十五日 神祇伯資敬王 勸遷」とあり、さらに箱の底には「正一位三瀨大明神」と記されている。弘化2年（1845）に三瀨明神は神位である「正一位」を授与されている。

そのほか保管されているものに櫛と笄（こうがい）もある。2つとも素材は鼈甲とみられ、櫛は長さ23cm、幅2.3cm、笄は長さ15.3cm、幅5.7cmである。明らかに女性のものであり使用した痕跡もみられる。これらを入れた箱には「神祇伯資延王 謹勸遷授位 正一位三瀨大明神 御體在中」とある。櫛と笄は「御體」つまりご神体を表すとみられる。青木家ではそれらは女性用のものであることから、三瀨（淵）明神とは、伝承にある卯の花姫であろうと考えられてきた。前述した文化4年の書状の書き出し下段に、小さい文字で「三瀨大明神祭所 罔象女神」と記されている。罔象女神とはミズハノメノカミと読み、一方では「水波能女神（命）」とも記され、神話では水を司る「女神」として登場する。箱の中には紙のお札「御神護」も納められ、その図の中央には鉾に龍が巻き付いた姿が描かれている。まさに大蛇つまり龍神信仰を意味するだろう。

ここで三瀨大明神が「罔象女神」とされていることについて簡潔に触れておきたい。一般的に、神社等の祭神名には古事記や日本書紀に登場する神々の名が使用されるのが通例であろう。三瀨（淵）の神にも神名を授けようとするならば、水を司るという役目の罔象女神という女神が適切であったと考えられる。その罔象女神は当地においては伝説の中の卯の花姫と結びつけられたことで、卯の花姫がいつそう神格化され、伝承では三瀨の神と卯の花姫が一体化されていったことが考えられる。以下に述べる「(3)寺泉村における三瀨（淵）神社の信仰 ①再建の際の寄付人名簿」の書き出し部分にみえる「水波能賣命」（ミズハノメノミコト）も罔象女神と同一神であり、ここでも三瀨（淵）の神と卯の花姫が一体化されていった形跡をうかがい知ることができる。

かつて青木家では祭りの旧暦8月1日は渋谷作兵衛家とともに野川上流方面に歩いて行き、川下り途中の明神様（青木・渋谷家では卯の花姫）をお出迎えしていたという。前述したように、その時に明神様は「半三郎、ごくろうさま」と言ったのが聞こえたという伝承も残されている。

青木家では、こうして迎えた明神様を自宅で盛大にもてなす宴を行っており、その参加者は流し木業者や用水堰の関係者など男性だったという。宴が終わればその日のうちにまた野川までみんなで歩いて行って、同じ場所で再び明神様が里宮まで下って行くのを見送ったとのことである。約10年前までは、寺泉の五所神社の氏子総代が、毎年お盆過ぎ頃に青木家に三瀨（淵）明神の参拝に訪れていたと言う。

青木家にみるように、流し木の守り神として関係者の間では三瀨（淵）明神に対するじつに篤い信仰がなされてきたことを、驚きとともに知ることができるのである。

### ③草岡村の雨乞いの神

三瀨（淵）明神に関しては旧『長井市史』に次のような出来事が記されている（注22）。すなわち、当地域で最大の旱魃だったとされる嘉永6年（1853）の大旱害に際して、「草岡村では小滝ヶ沢の大池や歓喜院の庭前、或は野川の三瀨明神などで雨乞いを行った」というのである。「雨乞いを龍神が棲むとされる淵や沼で行うのは全国

的にみられる」(注23) というように、河川や湖沼に棲息する大蛇(龍神)への祈願の一つとして雨乞いを行った事例は山形県内でも数多く聞かれる。

#### ④平吹家の堰の守り神

同じく旧『長井市史』によれば、前項の野川三堰の「栃木堰」に関して、その堰頭に五十川村の平吹市之丞という人物がいた。その人は自分の敷地内に三淵(淵)明神を建立して堰の守護神としたと言う。そのことについて以下のように記されている(注24)。

平吹市之丞は、寛政七年に同家の養子になると共に家督を継ぎ、先祖よりの大堰頭となり、栃木堰の改修や中小堰の疎通に主導的な役割を果たした。文化十三年に代官所直支配を命じられたのも、堰頭として永年栃木堰を運用せしめた功勞に対するものであった。また文政二年には、同家の館屋敷の西北に三淵明神の分霊を勧請し、小祠を建てて栃木堰の守護神として尊崇した。

平吹家の三淵(淵)明神は現在も敷地奥に建立されており、木製の祠で高さ189cm、横(間口)155cm、奥行138cmのお社である。中に入っていた棟札で、本稿に関係する3枚のうち最も古い明治8年(1875)銘には次のように記されている。

<表・墨書銘>

明治八乙亥年十一月	祭主	平吹俊邁	副戸長	新堰頭
	社守	大堰頭	佐藤兵内	手塚彦左衛門
		平吹市之丞	大堰小頭	孫田惣兵衛
奉 修復 三淵神社 一字			手塚惣吉	青木宇三郎
			高橋平次右衛門	大工成田村
			小嶋伊之助	佐々木常五郎
			佐々木右衛門	

<裏・墨書銘なし>

この棟札には「大堰頭」「大堰小頭」「新堰頭」の役職にある10人の名が記されている。その他2つの棟札は、大正2年(1913)に「葺替」、昭和12年(1937)に「改築」された際に奉納されたものである。いずれの棟札裏側にも「関(堰)頭」の役職者それぞれ5名の名が記されている。

文政2年(1819)の三淵(淵)明神勧請の目的は、栃木堰という農業用水に対する祈願であることは明白である。絶えない豊かな灌漑用水への人々の切実な祈りと願いが三淵(淵)明神への信仰を生み出してきたことが平吹家の事例からも十分に察することができる。

#### ⑤渋谷家の堰の守り神

寺泉の渋谷佐輔氏の敷地内にも三淵(淵)明神の石製祠がある。「口之宮 三淵神社」と記した木製標柱が立っており、高さ87cm、横(間口)30cm、奥行43cmのお社が鎮座している。お社裏側には渋谷姓をもつ7人の親族名が氏子として刻まれており、最後に「昭和62年7月入魂」とある。この年に古いお社を新しく建て替えたということである。古いお社は昭和40年代初期に渋谷家に遷座したものであり、それ以前は近く



を流れる栃木堰の側に鎮座していた。いつ頃の建立かその起源は不明である。かつての場所も渋谷家の土地であり、旧暦8月1日に上郷・野川隣組を中心に祭りを行っていた。その頃は宿回りで各自宅に参拝者を招いて「お御堂入れ」と称する祈願祭と宴席が設けられたという。

栃木堰近くから渋谷家敷地内へ遷座した後も、旧暦8月1日の夜に渋谷家に親族7人が集まって、三淵（淵）明神に供物をあげて参拝し自宅で酒席を設けている。親族7軒の輪番制でお祭りを行い、それぞれの家に集まって宴を行っていた時期もあったという。

渋谷家には野川上流の三淵明神のお社に使用された鍵が保管されている。鍵には木札が付いており、表裏には「明治三十三年 三淵神社鍵 氏子総代人」「明治三十三年八月一日 社務所」と墨書されている。明治33年（1900）に新しいお社を建立した際に渋谷家で預かったものという。明治32年に暴風雨がこの地域を襲って家屋等に大きな被害が出たが、この時に三淵明神のお社も壊滅的な被害を受けたので再建したようである。渋谷家では、鍵以外にも「三淵御神木 洪佐」と墨書した長さ約30cmの木片と、お社の一部を構成していたと思われる木製の彫刻飾りも保管されている。これら解体されたお社の一部は、今なお自宅茶の間の梁に掲げて往時を偲んでいるとのことである。

### (3)寺泉村における三淵（淵）神社の信仰

#### ①再建の際の寄付人名簿

明治33年の三淵（淵）明神の再建について、当時の詳細な記録は寺泉の上郷公民館「館報 上郷山」に記載されている（注25）。そこには再建の際の寄付人名簿が載っているが、明治33年9月23日付で書き出し（趣意文）には次のように記されている。

三淵神社ハ水波能賣命、日本武尊、大山祇命三種大神ヲ奉祀シタル社ニシテ野川水流鎮護神社ヲ以テ往古ヨリ水下旧村十六ヶ村ニテ崇敬維持シ来ル御社ナリ、然ルニ明治三十二年十二月廿四日暴風ノ為大破ニ相成再建ニハ多額ノ出費ヲ要スル事故、縁故村方諸氏ニ議リ多少ニ限ラズ御寄附申請再ビ社殿ヲ建築シ（以下略）

この文には、社掌の青木吏美を筆頭に崇敬人物代4人と発起人に長井町助役、西根村長、平野村長、豊原村長など7人の名前が連ねてある。そこに三淵（淵）明神は野川水流の鎮護を司る神社として「十六ヶ村ニテ崇敬」とあり、今さらながら野川水流の恩恵を受ける生活圏の広域性に感嘆する。よって、寄付人名簿には長井町大字宮・小出、長井村大字五十川・成田、勸進代、平野村、豊原村大字萩生・黒沢、豊田村大字時庭など、じつに広範囲にわたる地域在住者の名前がみえ、合計355人分の寄付金額が一人一人記入されている。遠方の萩生や時庭など野川の中村堰の恩恵を受けた地域の人々の名もあり、寄付金名簿からあらためて三淵（淵）明神が多く集落において信仰されてきた歴史を知ることができる。

その中で注目すべきは「流木者」として35人の名がひとかたまりに記されていることである。「流木者」とは、野川山から伐り出された木材を野川を通して長井の町場へ送る流し木関係者であろう。また、「流木者」の次に「人夫寄附」の欄もあり、30人の名前を確認することができる。この「人夫」とは流し木作業に直接従事する現場の作業員たちではなかろうかとも思われる。名簿の最後には「明治三十四年二月十三

日 流木者世話係 小笠原龍作」とある。このように寄付金者に流し木関係者が多く関わっていることは、三淵（淵）明神がどのような人々によって信仰されたのか、その事実を雄弁に物語っているだろう。

#### ②再々建の三淵（淵）神社

こうして再建された三淵（淵）明神であるが、38年が経過した昭和13年（1938）にまた新築される。それは高さ130cm、横（間口）60cm、奥行77cmの石製祠である。そのことについて同書『館報 上郷山』では、「側聞によれば、五所神社獅子舞連中の若い強者が敬神の念篤く、すべて手作業で峰を越えたとのこと、『背負って行った。柴でソリを作って引っ張った。』など、移送距離や祠の大きさを考えれば、計り知れない敬神パワーは想像に尽きない」と記している（注26）。この石製祠に安置されるご神体は、南天や松の木3本の凶柄に「上嶋和泉守」と刻まれた柄付きの青銅鏡である。祠の裏には「昭和十三年建立 石工 田中留五郎」とある。

この再々建された祠は、やがて長井ダム建設に伴って水没する運命にあり、移転を余儀なくされる。三淵（淵）明神は平成21年（2009）6月に野川の左岸から右岸山際に移転完了した。新しい住所は「長井市平野字三淵向4171-2」である。左岸の寺泉側から野川を挟んだ右岸の平野側へ移ったのである。

三淵（淵）明神への崇敬と再建や移転に関しては、一貫して寺泉村と五所神社が深く関わっていたことを知ることができる。このことを示すさらなる事例として、三淵（淵）神社が五所神社に合祀されていることである。

そのことについて、『五所神社の資料』の「郷社ニ昇格相成度義ニ付稟請」に次のように記されている（注27）。

大正四年六月五日、収学第二一七五号ノ一ヲ以テ合祀セル三淵神社ハ野川水下一帯元十六ヶ村ノ水上總鎮守ニシテ祭礼及社殿修理等ハ十六ヶ村ニ於テ怠慢無ク奉仕仕り候（後略）

この文の冒頭から、大正4年（1915）に三淵神社を五所神社に合祀したことが確認できる。現在の五所神社祭礼は8月15日に行っているが、氏子総代長・氏子委員・黒獅子保存会の方々、神社のお札を納めに祭礼の1か月後に、本社である野川上流の三淵（淵）明神に毎年欠かさず参拝している。このような五所神社関係者の律儀さも忘れずに付け加えておきたい。

#### (4)元禄銘の「三淵明神大絵図」

ところで、三淵（淵）明神への信仰はこれまでみてきた事例よりもっと古い時期まで遡ることができるようである。旧『長井市史』によれば、元禄9年（1696）9月19日に堀金村平右エ門、野呂八右エ門筆の絵馬「三淵明神大絵図」が総宮大明神に奉納されているのである（注28）。しかし、この「大絵図」なるものは現在は総宮神社に見出すことができない。どこかに保管されてあるのかどうか非常に興味深いところである。記録上は少なくとも江戸時代前期には野川流域の人々の心に三淵（淵）明神への信仰が確実にあったということができようか。

#### (5)卯の花姫の祭神化

すでに伝承の概要は紹介しているので繰り返さないが、重要なことは卯の花姫が義家軍に追いつめられて宮村鎮座の奥の院である三淵（淵）に登り、その神の前にぬか

づいて言葉を述べる場面が描かれていることである。ここが見逃してはならない部分であり、三淵（淵）の神に向かって卯の花姫が自ら犯した罪について懺悔するのである。そののち、卯の花姫は犯した重い罪の責任を一人背負い三淵（淵）に飛び込んで悲しい結末を迎える。以上から読み取れるのは、卯の花姫伝承より先に三淵（淵）の神があり、それが総宮大明神の奥の院であるという認識がすでに成立しているということである。

先にみた卯の花姫身投げの出来事の後日談が、旧『長井市史』（注29）および『長井一の宮 総宮神社縁起』に掲載されているので、以下に引用してみる（注30）。

朝日・祝瓶の壇で修行していた数名の修験者が御影森山の小峰を登っていくと、紫の雲にのった一人の美女が悠然と現れ、「この山は四神相応の勝地である。私が珍宝をこの地に納めてやろう。その方たちは早く道場をここに建ててよいい」といって山を下るように見えたが途中で姿が見えなくなり、三淵の滝壺の波紋が大きく広がっているのが見えた。そこで修験者や村人達はこの神は宮の明神の化身であろうと喜び、この三淵の滝壺を俯瞰できる所に神祠をたて、十八の日を祭礼とした。そして奥の宮を三淵、里の宮を宮の明神と呼ぶようになったのである。三淵は卯の花姫始め多くの女房達が身投げをした場所なので、見投淵、三淵、御淵ともいわれている。平安の頃(857年)から霊場として土民は八月朔日(一日)に、斎戒沐浴して祭礼を行い、干天の時は雨乞い等をして崇めてきたが、卯の花姫が身投げをして大蛇に化身して、竜神になったのだと信じ、卯の花姫を祭神として祀るようになったといわれている。

上記文では、紫雲に乗って現れてお告げをする美女こそ宮の明神（総宮大明神）の化身であろうということと神祠を建てたことになっている。すでに確認したように三淵（淵）は宮村に鎮座する神（総宮大明神）の奥の院とされているので、石造小祠またはお社のようなものは存在したことが考えられる。ここでは、現れた美女は卯の花姫であるとの認識が生まれ、卯の花姫が宮の明神の化身とみなされて、いつしか三淵（淵）明神へと結びついて一体化する流れがつくられていった点を確認しておきたい。

上記文の後段では、三淵（淵）は古くから雨乞いなどを行う霊場として祭礼を旧暦8月1日に定めて崇敬されてきたことが記されているが、すでに確認したように、三淵（淵）明神は大蛇（龍神）であり治水・利水を司る神として、雨乞いも含めて流域の人々に崇敬されている。そこに、卯の花姫が三淵（淵）に身を投げて大蛇に身を変えたという物語を通して、いつしか卯の花姫自身が三淵（淵）明神の祭神と化して祀られていく。

世に知られた「卯の花姫伝説」ではどう捉えられているか。『やまがたの伝説1 置賜の伝説』では「八幡太郎は、戦いを終えて三淵の滝壺に降り、姫の遺体をさがさせたが、遂に発見できず、ただ緋の衣だけが岸に流れついた。それを祀ったのが、三淵の奥の院である」と記されている（注31）。ここでは、卯の花姫が大蛇となったことや三淵（淵）明神の祭神となって祀られたとは記していない。これらの点も確認しておく必要がある。

#### (6)奥の院（奥宮）と里宮の成立

三淵（淵）と大蛇と卯の花姫の関係を時系列で整理すると、まず三淵（淵）には、



治水・利水を司る水神としての大蛇（龍神）信仰がありそれが崇拜の対象としてあったこと、そして三淵（淵）は総宮大明神の奥の院という認識が生まれていたこと、やがて卯の花姫伝承により大蛇は卯の花姫の化身であるという話が加わったこと、さらに姫自身が三淵（淵）明神の祭神とみなされていったこと、以上のような関係構図が描かれる。前述した『牛の涎』には、三淵（淵）に棲む大蛇つまり神人「あかるき命（神）」は幾ばく星霜を経て宮の地に移ったとある。それは、奥の院（奥宮）とされる三淵（淵）の神が先に存在して、総宮大明神はそののちに里宮として存在したという前後関係を暗示するものとなっている。これは野川の氾濫に対する治水祈願、あるいは流し木や農業用水（堰）への利水祈願から上流の奥の院（奥宮）の神祠建立が先立っており、そののちに総宮大明神の里宮設営へと進んでいった歴史過程がうかがわれる。多くの庶民の諸願成就を目的に、「奥宮の里宮化」が進んだことがそのストーリーから読み取れる。両宮は、大蛇（龍神）が総宮大明神の祭礼前夜に里宮に降りて来るという伝承創造によってさらに強固に結ばれていくことになる。

#### (7)物語性の強まり

これまでみてきたように、三淵（淵）の大蛇は総宮大明神の祭礼前夜に野川を下って社殿に入るという伝承が、いつしか卯の花姫が大蛇となって社殿に来訪するというようになって脚色されることになる。大蛇来訪伝説は、美しい姫伝説と重なっていっそう物語性が強まる。『牛の涎』などの内容をあらためて確認するならば、野川およびその上流の三淵（淵）には治水・利水を司る水神である大蛇（龍神）が棲んでいて川全体を支配しているとの信仰は先にあったと考えられる。河川がもたらす洪水などの災害から身の安全をはかるため、古代から大蛇＝龍神に祈りを捧げる慣習が定着してきたものであろう。また庶民生活における龍神信仰として、各地の川や湖沼には大蛇（龍神）が棲みついていると想像されて、雨乞いの際には雨をもたらす龍神に必死の祈りを捧げた事例は数知れない。そこに姫伝説が重なってくる話が各地に見出せるのである。龍神が女性や女神の化身として結びついている伝説は、瀬織津姫、玉依姫、市杵島姫、夜叉姫などが知られている。このような各地にある伝説を背景として、長井地方でも大蛇（龍神）と卯の花姫が結びつけられて伝説化したことが容易に想像できる。大蛇（龍神）信仰と卯の花姫伝承が結合して物語性がいっそう強められた。それが現在では、総宮大明神祭礼をはじめとする各地域の寺社の祭礼と黒獅子舞の芸能、さらに長井市あげての黒獅子まつりへと発展・展開する契機となっていることは大いに注目すべきことである。信仰や伝説は現実社会を動かす大いなる力を持っていることを如実に語っている。

## 4. まとめ

(1)置賜野川上流に祀られた三淵（淵）明神とは、野川の氾濫に対する流域の人々の治水祈願、あるいは流し木や農業用水（堰）の利水祈願の切実さから生み出されたものである。三（淵）淵には大蛇が棲んでいるという信仰が根付いていたことがわかるが、その背景に大蛇は治水や利水を司る水神様として流域16か村の人々に崇敬されてきた歴史があったのである。今なお個人の敷地や集落に三淵（淵）明神または三淵（淵）神社の祠やお社が建てられて祈りの対象となっていることは、その信仰の根強さを物



語る。黒獅子の芸能は野川と深く関わってきた流域の人々の苦闘の歴史が文化現象として今に伝えられている。

(2)卯の花姫伝承では、卯の花姫が三淵（淵）に身を投げて大蛇に身を変えたという物語を通して、いつしか卯の花姫自身が三淵（淵）明神の祭神と化して祀られていく。しかし、それ以前から三淵（淵）の神は祀られていたのであり、その神である大蛇こそが黒獅子の正体であった。黒獅子舞の発生における卯の花姫伝承は二次的要因ともいえるが、その脚色力によって黒獅子舞への興味関心は一段と高まったと言える。

(3)大蛇（龍神）は奥の院から野川を下って里宮である総宮大明神の祭礼前夜に社殿に入るといふ伝承は、神と人間を繋ぐ媒体伝承として創造されたものである。三淵（淵）明神が大蛇の姿を模した黒獅子となって集落を巡るのは、多くの人々に神の恩恵が授けられるようにとの庶民の知恵であり演出でもあったと言える。

(4)信仰や伝承は獅子の芸能を生み出し現実社会をも動かすから大きな力となっている。長井市周辺では黒獅子舞は各社寺の祭礼行事として定着し、その集合体である「ながい黒獅子まつり」は令和元年で30回を数え、今や地域の賑わいづくりに大いに貢献している。

## おわりに

本稿は黒獅子舞発生の根源にアプローチしたものであるが、黒獅子のカシラの「黒」はなぜなのか、ということも発生に関わる要因の一つとして検討する必要がある。大神楽系獅子舞のカシラの「赤」との違いを論じなければならない。しかし、このことについてはすでに紙数がつきており触れることがまったくできなかった。また他日を期したい。本稿を成すにあたり、長井市教育委員会の岩崎義信氏をはじめ職員の方々には大変お世話になった。また青木芳夫氏・青木芳弘氏、青木慶一氏、安部義彦氏、渋谷佐輔氏、平吹由起子氏・平吹登氏には調査にご協力をいただき、また数々のご教示を賜った。紙面をもって心より御礼を申し上げる。

## [注：引用文献]

- (1)旧『長井市史』第4巻 風土・文化・民俗編 長井市史編纂委員会 1985年 P 715
- (2)『日本民俗大辞典』下 吉川弘文館 2000年 P 801
- (3)前掲 旧『長井市史』第4巻 P 716
- (4)安部義一『総宮神社略誌』私家版 1956年 P 1 - P 2
- (5)『牛の涎』巻44の46 竹田市太郎『近世文書郷土資料』4 私家版 発行年不詳 P 230  
「牛の涎」については、『長井市史』第2巻近世編P 806 - P 816に「長沼牛翁と牛の涎」と題する詳細な紹介文が掲載されている。それによれば、長沼牛翁は宝暦11年（1761）に宮村の富商長沼惣右エ門の長男（幼名源太郎）として生まれ、天保5年（1834）に宮村大町丁橋庵にて74歳で亡くなっている。若い頃から医術など学問を志して郷里を離れて江戸などに29年間住み、戻ってきたのは文化6年（1809）である。郷里に戻った牛翁は医業のかたわら随筆集である『牛の涎』の執筆にあた

り、亡くなるまでの約30年間に記した56冊の原本が現在も残されている。当『長井市史』は、『牛の涎』には郷土の歴史を考える上で、重要なしかも良質な史料が数多く収められており、地域史或は民俗学・地誌学などの研究をこころざす者にとって、一度は必ず読まなければならない重要な資料であると言うことができよう」と記してその資料的価値を評価している。なお、竹田市太郎は『牛の涎』巻59および因本『牛の涎』巻10までを『近世郷土資料集』（全6冊）として刊行している。

- (6)前掲 旧『長井市史』第4巻 P 715
- (7)因本『牛の涎』巻9-17 竹田市太郎『近世文書郷土資料集』6 私家版 発行年不詳 P 231
- (8)旧『長井市史』第2巻 近世編 長井市史編纂委員会 1982年 P 258
- (9)『平野郷土誌』平野村郷土史編集委員会 1968年、『ふるさとの歴史』『ふるさとの歴史』編集委員会 長井市平野地区文化振興会 1986年 P 93-P 94
- (10)前掲 旧『長井市史』第2巻 P 240-P 259
- (11)『牛の涎』巻34-40 竹田市太郎『近世文書郷土資料集』2 私家版 発行年不詳 P 237
- (12)前掲『総宮神社略誌』P 51
- (13)同上 P 1
- (14)菅 徹次郎『長井一の宮 総宮神社縁起』総宮神社 2003年 P 134
- (15)『野川の郷』国土交通省東北地方整備局長井ダム工事事務所 1990年 P 172
- (16)前掲『長井一の宮 総宮神社縁起』P 134
- (17)『牛の涎』巻15の48 竹田市太郎『近世文書郷土資料集』2 私家版 発行年不詳 P 131-P 132
- (18)因本『牛の涎』巻9-17 竹田市太郎『近世文書郷土資料集』6 私家版 発行年不詳 P 231-P 232
- この巻9-17の題名は「宮村明神」とあり、「羽州米澤下長居村鎮座明神は上古ハ五所明神と申せし也」から始まり、総宮大明神の成り立ちについて古代に遡って記したものである。ここでは、『牛の涎』巻15の48「卯の花姫」における「三瀨の神ハ宮村鎮座の神の奥の院なれハ、誓ひの事ありとて三瀨に至り神にぬかつき（以下略）」とある「三瀨の神」とは本来何かについて、より詳細に言及している。つまり因本『牛の涎』巻9-17においては、三瀨の神は「大蛇」であるという古代からの伝えを改めて記すことによって、三瀨の神の原初的姿を明らかにしたものと考えられる。
- (19)前掲『野川の郷』P 85
- (20)前掲 旧『長井市史』第2巻 P 455
- (21)前掲『野川の郷』P 87
- (22)前掲 旧『長井市史』第2巻 P 256
- (23)前掲『日本民俗大辞典』下 P 801
- (24)前掲 旧『長井市史』第2巻 P 249
- (25)『館報上郷山』平成21年度 自治公民館活性化事業「ふるさとの歴史と伝承-三瀨によせて-」上郷公民館広報部 2010年 P 14-P 23
- (26)同上 P 23
- (27)『五所神社の資料』第44回西根地区文化祭郷土資料企画展「西根の村社展」青木慶一 2016年 P 7

(28)前掲 旧『長井市史』第2巻 P966

(29)旧『長井市史』第1巻 原始・古代・中世編 長井市史編纂委員会 1984年 P627

(30)前掲『長井一の宮 総宮神社縁起』P20

(31)武田正『やまがたの伝説1 置賜の伝説』東北出版企画 1979年 P116